
竹光侍（たけみつざむらい）真剣勝負

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たけみつとむら
竹光侍真剣勝負

【Nコード】

N4756E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

時は幕末。争いごとが嫌いな旗本、早乙女兵衛。だが、ある日事件に巻き込まれてしまう……

浦賀沖に黒船が来て以来みんなおかしくなつたと、早乙女兵衛は感じていた。

何かあればすぐに殺気だち、やれ尊王そのうだやれ攘夷じょういだと騒ぎたてる。まったく嫌な世の中になつたものだ。

争いごとが嫌いな兵衛には、まことに息苦しい時代。

兵衛は子供の頃から、竹刀を振るうよりソロバンを弾く方が得意な少年だった。

本当は商家に産まれたかつたのにと、妻の八重やえに愚痴をこぼすこともある。

何の因果か旗本の家に産まれたばかりに、彼のこの悩みは一生続くのだ。

「あなたは世の中の争い事などお気になさらず、のんびりとお過ごしになって下さればそれで良いのです」

八重は笑ってこう言ってくれる。

2年前に兵衛のもとに嫁いできた、まだ20歳の花盛り。

子供がいなせいか、少女に見えることすらある嫁だった。

ちなみに兵衛は今年で30歳。

チラリと兵衛が妻を盗み見た。

つぶらな瞳できょんと兵衛を見つめ返すその姿は、とても愛らしい。

近頃とみに女らしくなつたと兵衛は思っていた。

何というか……腰のあたりの肉付きがふっくらとしきて、艶が出てきたのだ。

それは、習い事のせいかもしれないと兵衛は想像する。

去年の暮れぐらいからだ、彼女はとある寺の和尚に和歌や俳句、茶道や華道などを習い始めていた。

彼女の他にも数人の奥方連中と一緒にいるらしい。

なかなか教養のある和尚で、兵衛も面識があった。

鼻すじの通ったなかなかの美男子で女性受けも良い。

そんな和尚の元でわいわい、キヤーキヤー皆と一緒に楽しんでいくようにする。

家の中に引き込まれていた新婚当初よりも、外の空気を存分に吸っている今の方がやはり女性としては良いのだろう。

八重は確実に美しくなった。

そんな美しい女房に慰められて、兵衛はありがたく思いながらも、ついついこんな憎まれ口を叩いてしまう。

「仮にも200石どりの旗本にそれは失礼な言い方であろう。そんなたは武家の妻としての自覚が足りぬぞ」

200石は決して高級取りではない。

だが、夫婦二人なら何とか暮らしていける額ではある。

兵衛はそれで満足だったし、妻の八重もそうだ。

されど彼としてはもう少しこの若い妻が、夫の出世を望んでくれないのになと思っていた。

同僚の奥方たちは、もったときつい言い方で夫にくっついてかかる事もしばしばあると聞く。

なのにこの若くて可愛い妻は、笑顔を振り撒きながら「今のままで良いですよ」などと言うのだ。

そんな妻を見ると兵衛は、自分が男として見放された役立たずのようになってしまう。

実際、夜の御勤めの方はすっかり弱くなって、まさに役立たず状

態になっているというのに……

「あら、お前様。そのような意地悪をおっしゃいますか？」

夫の言葉に妻は大袈裟に驚いてみせた。

それから、含み笑いを浮かべてこう続ける。

「ならば武家の妻としてちゃんと言わねばなりませぬなあ。ではお前様、いくら重いとはいえ旗本たるお方が、真剣の代りに竹光を差して出歩くのはいかがなものでしょうか？」

れっきとした武士が刀の代りに竹光を差している？

竹光とは竹で作った偽物の刀。

言わば玩具だ。

貧しい浪人ならばいざ知らず、そんなものを200石取りの旗本が携行するなんて、ちょっと考えられない。

だが、驚くなかれ。

実はこの兵衛、妻の言う通り普段は真剣の代りに竹光を差して歩いているのだ。

もっとも、理由は貧乏のせいではない。

きちんと毎月の手当てがつく旗本の兵衛に、刀を手放す必要はない。

実際、彼の家の蔵に行けば真剣の二本や三本、ちゃんと置いてある。

理由は別のところにあるのだ。

それは、天下太平のまま三百年近くも続いた徳川時代のせい。身近で争いなど起こりはせぬと、兵衛はたかをくくっていた。だから真剣など必要はない。そう思っている。

もつとも、黒船が来てからは何かと物騒ではあるのだが……

そしてもう一つ。

八重も言ってたが真剣は重い。

それが兵衛には耐えられない。

夏場など体力のない彼には、重い鉄製の日本刀は地獄の苦しみをもたらす拷問器具の如し。

逆に竹光ならば軽くて便利だ。

刀を抜く事など滅多にないのだから、中身が竹でも困りはしないし、他人には分かりもしない。

そこでいつしか兵衛は刀ではなく、竹光を携行して出歩くようになったのである。

「あいたたた、痛い所を付かれたなあ。いや、まいった、まいった」

「おほほほ、それご覧なさいまし。無理することはございません。あなた様は今まで通りのんびりとお役目を果して下さりませ。八重はそれで満足なのでございますから」

「うむ、あい分かった」

なんて良い妻なのだろうと兵衛は思う。

私は日本一の幸せ者だ。

そして、兵衛は照れ臭そうに頭をかき、八重は口に手を添え上品に笑い合う。

これがこの家の日常であった。

のんびり旗本、早乙女兵衛。

こうしてまた激動の時代に竹光を差し、一人、お気楽極楽に毎日を過ごすのであった。

さて……

そんな彼が公務でとある寺を訪れていた時のこと。

事件は起きた。

兵衛は寺社奉行所の役人。寺には何かと縁がある。

しかも、その寺は妻の八重が世話になっているあの和尚がいる寺だった。

名を倫光寺。^{りんこうじ} ついでに言えば住職の名は真羅和尚。^{しんら}

兵衛は、妻がいつも世話になっているお礼もせねばなと思いながら、急ぎ足で向かっていった。

だが運の悪いことに、その日は年に一度の祭りの真っ最中。

倫光寺へ続く通りは、大勢の人出で賑わっていた。

様々な出店が立ち並び、所々で大道芸人が見世物を披露している。その周りを見物人たちが二重三重に取り囲む。

人混みの中を縫うように歩く兵衛だが、当然目的地にはなかなかつかない。

「うーむ、凄い人ばかりだ。困ったなあ」

公務中の彼にとってこの祭りは迷惑千万……のはずなのだが、ついつい気持ちが浮き立ってしまうのがこの旗本らしいところ。

（ほほう、綺麗なかんざしだなあ。八重に似合いそうだ）とか（この饅頭はうまそうだ。帰りに土産に買ってかえろう）などと出店を覗き見しながら思いをさ迷わせていた。

今も昔も役人というものはこんなものかもしれない。だが、それがいけなかったのだ。

カッ！

突然、よそ見をして歩いていた兵衛の耳に景氣の良い音が響く。
はっとして振り向くと、すぐそこにいたのは一人の武士。

おそらく浪人。

洗いざらしのすりきれた着物に、履きすぎて底がなくなったボロ草鞋。

見るからに貧乏浪人だった。

もちろん、見知らぬ顔。

歳は兵衛より上だろうか。

だが、その男。

顔を真つ赤にして兵衛を睨みつけているではないか。

はて、何を怒っているのだろう？

身に覚えはない。

でも浪人は、頭から湯気をたてんばかりに怒っている。

いったい何故だ？

一瞬、兵衛の脳裏に疑問符が浮かぶ。

だが……すぐにあることに気がついた。

（そういえばあの音……もしかすると、私の竹刀が相手の刀にぶつかった音か？）

その通りである。

すっかりして彼は自分の竹刀の鞘を、浪人の刀の鞘にぶつけてしまったのだ。

理由が分かった途端に冷や汗が滝のように出てくる兵衛。

現代では分からぬ感覚であるが、当時の侍にとって刀は魂。

その刀に何かをぶつけるとは、決して許せぬろうぜきなのだ。

過去、長い武士の歴史の中で、このすっかりミスが原因で何度殺し合いが起こったことか……

「し、知らぬ事とはいえ、あいすまぬ事をいたした」

兵衛はすぐに頭を下げた。

これは珍しい光景だと何人かの見物人がはやしたてる。

確かにこの度の不始末は、兵衛のよそ見が原因。

だが、ぶつかつた相手にも少なからず非はあるのだ。

そう思つのが常人の考えである。

だから、兵衛みたいに簡単に詫びる事はいかにも珍しい。

それも旗本が浪人に詫びるなど……

さすがは争い事を嫌う兵衛。

彼らしい。良く言えば潔い、悪く言えば意気地のない謝りっぷり。

だが、別の見物人はつまらねえぞ、とやじり始めた。

火事と喧嘩は江戸の華、それも武士の喧嘩は一見の価値ありと、

町人たちは興味本意で集まつて来る。

そんな町人たちにあおられたせいだろうか……詫びる兵衛に浪人が頭を振った。

「いいや、許さん！」

素直に謝つた兵衛に対して、浪人はあくまで高飛車である。

普通は、旗本。下っぱとはいえ幕府の役人に対して、ただの浪人がこのような態度を取る事はまず無いはず。

これも黒船の到来が悪いのだと兵衛は胸の内でつぶやいた。

ようするに、今は幕府の権威が過去にないほど著しく衰えている時代。

寺社奉行所の下役人くらいでは、浪人にすら舐められるご時世なのである。

やれやれ。

兵衛は心の中でため息を吐いた。

「許さんと言われても……こちらはこうして頭を下げているではないか。これ以上どうしろと言うのだ？」

兵衛は道理を語ったつもりである。

されど、町人たちの後押しを受け調子にのった浪人には通じない。

「いや、許せぬ。こうなれば決闘だ！ いざ尋常に勝負」

そうだ、やれやれ、と町人たちは興奮して叫ぶ。

浪人の方は、いつでも鞘から刀身を抜くような身構えた体勢。かなりできるなこの浪人、兵衛はたじろいてしまう。

どうしよう？

ソロバンは得意なのが、剣術はからっきし駄目なのだ。

決闘など論外である。

それに、今は竹光じゃないか！

勝負にならん。

何とか今は決闘を避けなければ。

兵衛は必死で考えた。

「お、お主。決闘がお上に禁じられているのを知らんのか？ 喧嘩両成敗なんだぞ！」

うまい口実を思いついたと兵衛は思わずほくそえむ。

でも、実際そうなのである。

例え正当な理由があったとしても、幕府は私闘を禁じている。勝っても死罪は免れないのだ。

「お、お主も武士なら分かるであろっ？」

だが、浪人は下品に笑うところ言った。

「ふん、汚らしい異国の者共が、この神州に土足で踏み入るのを防ぐ事もできぬ幕府の決めた法令など怖いものか！ ささ、いざ尋常に勝負せい」

まったく、この浪人の言う通りだ。

いや、この男の言葉に正当性があるか否かではなく、皆がこんな考え方をしはじめていくということだ。

兵衛は辟易する。

もはや戦いを避ける事はできないらしい。

ならば……旗本として情けない事はできぬな。

仕方ない、決闘は受けよう。

一瞬の決断。

だが、何としても今日だけは避けたい。

死ぬとしても竹光で死にたくはない、と兵衛は思う。

ならば……どうする？

しばらく考えた後に、兵衛は力強くうなずいた。

「あい分かった」

その短い答えに、浪人は意外そうに目を丸くした。

まるつきりこのひ弱そうな役人を舐めていたのだろう。

兵衛が走って逃げ出す事を予想していたのだ。

それが、逃げもせず決闘を了承するとは……意外と勇気のあるやつだ。

だが、それは困るなと浪人は胸の奥でつぶやく。

実は、兵衛だけじゃない。

何とこの浪人も今、決闘を受けられては困る立場であった。

何故ならこの浪人の刀も……竹光だったのである。

理由はもちろん金のため。

つい先日、自らの刀を泣く泣く質屋に質入れしたばかり。

武士の魂を手放すのは相当悩んだが、背に腹はかえられぬ。

彼にも妻があり、家族を養わねばならない。

だが、武士が玩具の刀を身につけて歩くなど……屈辱でしかない。

そんな苛々をとろそうな役人風の男（早乙女兵衛）にぶつけてみたのだが、とんだヤブヘビになりそうだった。

どうしよう？

その時、困惑する浪人に救いの手ならぬ救いの声が聞こえてきた。それは決闘を了承した当の兵衛からであった。

「しかし、今は駄目だ。日を改めよう」

そう語る旗本の言葉に、浪人がほっとした表情を浮かべた。

助かったあ、とまあそんな気持ちだろう。

だが、表には決して出せない。

「なんだ、やはり臆したのか？」

なるべくふてぶてしく、にやりと笑ってみせる。

しかし、その頬には僅かに歪みが生じていた。

緊張のせいだ。

腕っ節に自信がありそうな男だが、やはり命のやり取りは恐ろしいのだろうか？

兵衛などはそんな風に考えたのだが、実際は竹光であるのがバレるのが怖いからだ。

「そうではない。ここは寺の境内にあまりに近い。それに今は祭りの最中。神域を血で汚す訳にもいくまい」

「な、なるほど。道理ではあるな」

浪人が大きくうなづく。

ここは是が非でも兵衛の提案に乗らねばならない。

「そこでだ、日を改めて仕合いたそう。立ち会い人はその寺の和尚に頼もう。私とは馴染みだ。頼めば嫌とは言わぬだろう。どうじや？」

「う、うーん……わ、分かった。承知しよう」

浪人がしぶしぶ応じる。

心の内では舌打ちしたのかもしれない。

やはり決闘はするのか、と。

自分から言い出した事ではあるが浪人の気は重いいや決闘自体は良いのだ。

だが、刀……

質屋からどうやって自分の刀を取り返そう？

金はもう使ってしまったというのに。

後悔先に立たずだ。

だがここまで来れば、兵衛も浪人も後には引けぬ。

双方そろって人混みをかきわけ倫光寺に向き、住職の真羅和尚に立ち会い人を頼み込んだ。

三人での話し合いの結果、3日後早朝に命がけの仕合が決まった。

(えらいことになったなあ)

これが、果たし合いが決まった直後の、兵衛と浪人の偽らざらぬ気持ちであつたのは言つまでもない。

「はあ……八重に何て言おう？」

兵衛は沈んだ肩を一度も上げる事なく職場に戻った。
仕事はまだ途中で他にも回らねばならぬ寺が数箇所あつたのだが、今の兵衛にそのような些細な事は頭の片隅にものぼらない。
初めて命がけの戦いを経験するのだ、無理もない。
その日、兵衛は魂が抜けたような顔で一日を過ごしたのであつた。

一方、浪人はすぐ家路についた。
とある長屋に妻と二人暮らし。

古びた扉をガタガタこじ開けると、開口一番こう言った。

「おい、茜、^{あかね}刀がいるんだ。何とかしてくれ！」

「あら、お帰り。って刀……だつて？」

浪人の名は酒井次郎太。^{さかいじろうた}

兵衛より七つ年上の三十七歳。
妻の茜は兵衛と同じ三十歳だ。

「どうしたんだい、お前さん？」

いつもと違い暗い表情の夫に、妻が心配そう尋ねる。
だが、そんな妻の言葉に次郎太は黙つたまま。
年甲斐もなく決闘など、さすがに恥ずかしくて言えないのだ。

「黙ってちゃ分からないよ。何があつたんだい？」

妻の執拗な追求に次郎太はようやく白状する。

いや、むしろ話さないではいられなかったのかもしれない。
深刻な顔で一言。

「決闘をする、つまり果たし合いだ」

「決闘……って何時だい、何処で、誰と、どうしてそんな事になつたんだい？」

驚きも束の間、立て続けに質問を返す妻。

「み、三日後だ。場所は近所の河原、相手は早乙女兵衛とかいう旗本だ。そして、立ち会い人は倫光寺の真羅って坊主だ」

「えっ、倫光寺の？」

「何だ、知ってるのか？」

「そんなこと、どうでもいいでしょ！ それよりどうして果たし合いなんかになったのさ？」

「どうしてって、それは……武士の意地のせいだ。女には分からん」

ふてくされて語る夫に妻が不満そうに返す。

「ふん、大方つまない理由なんだろう？ それにしても旗本と決闘だなんて、本当に馬鹿だねえ」

「う、うるさい！ ごちゃごちゃ言わずに質屋に行って刀を返して
もらってこい」

「出来るわけないだろう、そんなこと」

茜がこれ以上ないくらい白い目で夫を睨む。

「金は何処にあるのさ？」

「だから、何とかせいと頼んでいる」

「何ともなるもんかい。刀もないのに決闘だなんて、本当に馬鹿だ
よ、あんたは」

妻が吐き捨てる。

いつもこうなのだ、この男は。

外見は強面で腕もそこそこある。

だが、思慮がない。

だから、いつまでたっても仕官できず、浪人のまま。

以前は用心棒の仕事などもあってそれなりに稼いでいたのだが、
最近はどうも歳だという理由でその仕事もなくなってきた。

時代は激動の時代。

あと10年若ければそれなりの活躍ができたかもしれないのに。

茜はほぞを噛む思いだった。

（いい加減見放してやろうかしら？）

ついそんな考えが脳裏をよぎる。

いや、実際のところ半分以上見放しているのだけど……

それにしても決闘相手、早乙女兵衛とは何処かで聞いた名前だ。
何処で聞いたのかしら？

茜はふがない夫に対する怒りをいったん沈め、覚えがある対戦
相手の名前の事を黙考しはじめた。

一体何処で聞いた名前だろう？

そんな妻をいぶかしげに見つめる次郎太。
おずおずと声をかける。

「どうした、茜？」

「しっ、黙って！」

早乙女兵衛……何処かで聞いた……早乙女？ 早乙女って……あ
っ！

「八重さんの旦那さんだ！」

目の前の濃い霧が、パァーと晴れたような気がした。
実はこの茜、縁あって早乙女兵衛の妻、八重とは顔馴染みだった
のだ。

「うふふ、何だあ、そうかい。八重さんの所の旦那さんかい」

嬉しそうに目を細める茜。

次郎太は一人蚊帳の外。

にやける妻の頭がついにおかしくなったのかと心配する。

「大丈夫か、お前？」

「安心しなお前さん。あたしはちよつと出かけてくるからね」

「またかよ。最近よく出かけるなあ」

次郎太が不満そうにつぶやく。

「今日は特別だよ。それにあなたの尻ぬぐいをしてやろつてんだ。感謝してもらいたいね」

「えっ、じゃあ質屋から刀を取り返してくれるのか？」

「まあまあ、任せときな！」

勇ましい妻の言葉に、次郎太はただうなずくだけ。
颯爽と出かける妻を黙って見送る。

「た、頼んだぜ」

ようやく次郎太の声が出た頃には、茜はとっくに通りを歩いていた。

さて、茜が向かったのはもちろん旗本、早乙女兵衛の妻、八重のもと。

今度の決闘について知らせるためだ。

「ごめんよ、八重さんいるかい？」

まるで男のようなきつぷの良さで、小さな旗本屋敷の門をくぐる。すると、そこには竹ぼうきで庭を掃いている八重がいた。

「あ、茜さん」

慌てて八重が駆けよってくる。

「困りますよ、もうすぐ主人が帰ってきますのに」

「ごめんごめん。でもそのご主人の事で……ちよつとね」

「主人の事？」

さつそく茜は八重に事の顛末を話して聴かせた。みるみる間に顔が青くなる八重。

「あの人が……決闘？」

「まあ、うちの馬鹿がふっかけた喧嘩だろうけどね」

片目をつむりながら茜が続ける。

「あんな亭主でもないよりはいた方がいいし、それはお宅もだろ
う？」

「当然です！」

涙目の八重。

茜はくすくすと笑いながら先を続ける。

「でさ、お互いの旦那を助けるためにどうしたら良いのか相談に来たのさ」

「そういう事でしたら、どうぞあがって下さいな」

八重の勧めに、茜が手を振る。

「いやいや、それがねえ、この果たし合いの立ち会い人が、何と倫光寺の真羅様に決まったらしいのよ」

「まあ、和尚様が？」

八重の顔に明るい笑みが浮かぶ。

真羅和尚にはいつもお世話になっている。

何かと頼りにしているお方。

そして、茜にとってもそうなのだ。

ようするに、二人は和歌や茶道を教えてくれる真羅和尚の姉妹弟子にあたる。

そんな繋がりなのであった。

「だからさ、二人で今から行かないかい？ 倫光寺へさ。和尚なら何かいい知恵を貸してくれるよ」

「そうですね。もちろんお供します」

こうして二人は仲良く並んで出かけた。

夫たちは命がけの戦いを控えてる間柄だというのに、不思議なものだと話し合いながら……

足取りも遅く早乙女兵衛が帰宅した時には、とっくに八重は倫光寺から帰ってきていた。

兵衛はなるべく普段通りを心がけていたのだが、いきなり出鼻をくじかれる。

「お前様、果たし合いの話、聞きましたわ」

「な、なに？ 一体誰にだ？」

「そんなことは良いではございませぬか。それよりもこれを」

八重が差し出したのは一振りの刀。

少し、みすばらしい長脇差しだ。

だが、何処かで見た覚えもある。

兵衛はよくよく覗き込んで観察する。

思い出せない。

彼の所蔵するものではない。

こんな安物は早乙女家の蔵にはないはずである。

しかも、何やらお経らしき文字が書かれた札で、しっかりと鞘と柄が封印されている。

これでは刀身を見ることもできない。

「八重、これはなんだ？」

「お前様の果たし合いのために、特別な刀をを譲り受けて参りました」

「特別な？ いったい何処から？」

「倫光寺の真羅和尚様です」

なるほど、と兵衛は合点がいった。

彼には明後日にある果たし合いの立ち会い人を頼んだばかり。

八重はそこで今回の決闘の事を聞いたに違いない、と兵衛は思った。

「このお札の封は、本番まで決して取ってはならぬと和尚様に言われました。取ればご利益が消えてしまうと」

「ご利益とな？」

「はい、この刀で仕合に臨めば勝利は間違いなしと」

「本当か？」

「はい」

何だか眉唾な話である。

されど八重は大真面目だ。

そんな妻の迫力に兵衛はうなずくしかなかった。

「うむ、あい分かった」

その言葉に八重は安堵のため息を吐く。

「ありがとうございます。さて、それではお前様。お腰のものを
お預かりいたします」

「なに？ この竹光をか？」

「はい」

「これをどうする」

「はい、果たし合いが終わるまで、頂いた刀の代りに倫光寺に預けまする」

「倫光寺に？ 何故じゃ？」

「さあ、そこまでは。ただ和尚様が言われるにはこれもご利益のためとか」

「変なご利益だなあ」

兵衛は首を傾げた。

だが、すぐに腰から竹光を抜く。
さつとそれを受け取る妻。

「では、ちょっと行ってまいります」

「今から行くのか？」

「はい、これもご利益のため」

「ふーん、ご利益のためかあ」

釈然としないものを残して、八重はそそくさと出かけて行った。
後には狐につままれたような兵衛が一人、残された。

場面は変わって、貧乏長屋。
浪人、酒井次郎太の部屋。

「ただいま、あんた」

次郎太の妻、茜が声を弾ませて入ってきた。
手には細長い包みを持っている。

「何だよ茜。俺の竹光、勝手に持って行きやがってえ」

「しょうがないだろ？ この刀を手に入れるためなんだから」

茜が大事そうに持っていた包みを差し出す。

「何？ ってことは取り戻せたのか、俺の真剣！」

「違うよ。でも、もっといい刀さ」

見れば包みの中には長脇差がある。
なかなか見栄えも良い。

だが、どこかで見たような……

次郎太は茜から受け取った刀をもっと見ようと目を凝らす。
しかし……もつと気になる事を発見してしまった。

「何だ、こりゃ？」

刀には変なお札がしっかり貼られているのだ。
それも鞘から刀身が抜けないように、びっしりと。

「これはねえ、御守りだよ」

「御守りい？」

「そうよ、倫光寺の真羅和尚が特別に譲ってくれたんだから」

「倫光寺の真羅って……おいおい、今度の果たし合いの立ち会い人じゃねえか？」

「そうよ。あたし、あの和尚に和歌とか色々教わってるんだ。偶然だよねえ」

妻の言葉に、次郎太があからさまに嫌な顔をする。

「はーん、お前がしょっちゅう出かける先は……あの寺なのか？」

「そうよ、いいじゃない。あたしだって風流したいもん」

「風流ってがらかよ。それにお前が和歌なんぞ作ってるのを、俺は一度たりとも見たことねえぞ？」

「か、隠れてやってるの！ いやあねえ、能ある鷹は爪隠すって言うでしょ」

「へえ……でも月謝は高けえんだろ？ 勿体無えなあ」

貧乏浪人らしい愚痴がでる。

何処の馬の骨とも分からぬ坊主に、なけなしの金を渡すなんて次郎太には我慢ならない事態であった。

だが、茜の答えは次郎太には意外なもの。

「ただよ」

「ただあ？ 本当かよ」

ただより高いものはないと言うが、後で悪い事が起きなきゃいいが……

次郎太は心配になってきた。

「で、この刀はいくらしたんだ？」

「もちろん、ただよ」

「怪しいなあ。何か企んでいるんじゃないかねえだろうな、その坊主」

いよいよもって怪しいと感じる。

「何てこと言うんだい、このバチあたりが！ あの人ねえ、徳の高い偉いお方なんだよ。あんたと一緒にするんじゃないの」

いきなり、大変な剣幕で怒りだした茜。

もはや、次郎太としては妻の言葉にうなずくしかない。だが、やはり気になるのは刀に張り付いたお札である。

「これ……取っていいのか？」

次郎太が刀に張り付いたお札を指さす。

「馬鹿言っでんじゃないよ！」

茜は先ほどから怒りっぱなしだ。

「御守りだって言ってるでしょ！ これは本番までこのままにしないといけないの」

「でも、素振りとかしたいし」

「駄目ったら駄目。素振りなら……ほらそこにあるスリコギ棒でしな！」

「スリコギ棒なんかで素振りができるか」

「とにかく駄目なの。この刀は本番まであたしが預かっておくから」

こうして茜は、次郎太からお札が張り付いた刀を取り上げると、何処かに持って行ってしまった。

「へん、あんなお札で仕合に勝てるなら苦労はしねえよ」

拍子抜けした次郎太がつぶやく。

でも、まあ、これで真剣が手に入ったことだ。

明後日は頑張ろう。

そう決意する次郎太であった。

そして、明後日がきた。

早朝だというのにやけに暑い。

もう、夏はそこまで来ているようだ。

決闘場所の河原にはうっすら朝靄がかかっている。
人気はない。

早乙女兵衛と酒井次郎太、そして倫光寺の和尚、真羅の三人のみ。

「それでは御両人様、よろしいですか？」

淡麗な顔立ちの真羅和尚が二人を見くらべながら言った。

二人とも札のついた長脇差しを腰につけている。

「あつ、いや、ちょっと……」

「それがしも……」

住職の言葉に慌てる兵衛と次郎太。

急いでお札を剥がしにかかる。

二人とも妻に言われたように、この時まで封印をとかずにといたよ
うだ。

そんな姿を、真羅和尚がにこやかに眺めていた。

「お待たせいたしました」

「それがしも、準備できもうした」

固い表情で二人がうなずく。

いよいよ、命がけの決闘が始まるのだ。

「では、御両人。勝っても負けても恨み無しでお願い致しますよ」

「承知！」

「同じく！」

凜とした空気が張り巡らされる。

兵衛と次郎太、二人の殺気が限界にまで高まる。

そして、その時。

満を持して真羅が掛け声をかけた。

「始め！」

おおっという雄叫びを上げ、二人は同時に鞘から刀を抜き放つ。

ようやく差し込んできた太陽が、二人の長脇差しを明るく照らす。

白金造りの刀身が眩しいくらいに、太陽光線を弾く……筈であったが。

「た、竹光？」

「そ、それがしのも……竹光じゃ」

「一体、これは？」

急速に殺気が薄れた。

すると、立ち会い人の真羅が一際大きな声でこう言った。

「そこまで！」

あっという間の終了宣言。

切り合うどころか、刀を合わせてもいない。

「お二人とも、天晴れでございますなあ」

しみじみと語る真羅和尚。

「天晴れ……ですか？」

呆然とした顔で兵衛が聞き返す。

「さよう、兵衛殿も次郎太殿も相手を気遣い、敢えて傷付けない竹光で仕合に臨んだ。これ誠に仏の御心。天晴れでございます」

「へっ、あつ、はあ」

次郎太も何と答えていいか分からぬ表情。

「武士の生きざまは難しいもの。時には引くに引けぬ事もございましょう。こうした真剣勝負もその一つ。されどお二人はそんな中でも慈悲の心を忘れませなんだ。誠に天晴れ……この真羅、感服つかまつりました」

「……」

「そして、もう一つ付け加えておきますと、お二人とも素晴らしい奥方をお持ちのようです。ゆめゆめおろそかにしてはなりませんぞ」

そして、和尚は言うだけ言うたとさつさと帰ってしまった。

残された二人。

暫くつつ立っていたが……

すぐに気がついた。

なるほど、妻の企みだと。

兵衛と次郎太は顔を見合わせた。

どちらともなく、ぷつと吹き出してしまふ。

「やれやれ、お互いにやられましたな」

「まったく、女というやからは困ったもので」

二人は高らかに笑いあつた。

真剣勝負は終わったのだ。

結果は負け。

そう、彼らは負けた。お互いの妻に。

だが、納得のいく負けではないか。

二人は手を振って別れを告げる。

帰って妻を誉めてやろう。いや、手について感謝しなければならんかな？

そんな事を考えながら……

後日。

倫光寺の一室でのこと。

真羅和尚の部屋に八重と茜が竹光を抱えてやってきた。

八重は茜から預かった次郎太の竹光を。

一方、茜は八重から預かった兵衛の竹光をそれぞれ持参したのだ。

つまり、二人はお互いの夫の竹光を交換したというわけ。

それぞれの夫に語った、勝つための特別な刀などではないのだ。

果たし合いに竹光ではお互い殺し合いはできない。

これが和尚と相談した結果、二人が出した答え。

そして本番、和尚がうまく言いくるめ平和裏に決闘を終らせるといつからくりだった。

「うまくいきましたねえ、茜さん」

八重が可愛らしい微笑みを浮かべて言った。

「まったくねえ。これも和尚様のおかげだわ」

茜も負けじと微笑み返す。

「いやあ、運が良かったんですよ」

和尚も静かな笑みを浮かべた。

「それにしても……お互い腰のものが竹光だったなんて、可笑しいわあ」

「まったく間抜けな話だよ」

「これも御仏の巡り合わせでしょうか？」

三人は大きな声で笑った。

そして……

ひとしきり笑いあった後で、茜が言った。

「それで……あのう、ねえ、真羅様？ そのう今から、あれ駄目ですかあ？」

三十路女の色っぽい声色が響く。

「ああっ、ずるいわ茜さん。だったら私も和尚様に抱いて欲しい！」

こちらは、若い娘の瑞瑞しい色気。

茜と違い、ずばりと直球でのお願いだ。

「やれやれ、困ったお方たちだ。御亭主がおありの身で」

真羅が心にもない科白をはく。

実はこの坊主、整った顔立ちと高い教養、そして女を喜ばせる秘術によって、近づく奥方たちを毒牙にかけるとんだ生臭であったのだ。

生娘は決して狙わない。

後々、夫婦になってくれと迫られ面倒な事になるからだ。

でも、亭主持ちなら秘密を守りやすい。

だから、真羅が狙うのはいつも奥方のみ。

もうすでに八重と茜は、すっかりこの生臭坊主に魂を抜きとられていた。

「あんな出来の悪い浪人亭主より、真羅様の方が素敵なんですもの」

茜が本気で言った。

次郎太が聞いたらきつと泣くことだろう。

「そうそう。うちの主人なんて、あそこまで竹光なんですよう。使いものになりやしないんです。もう1年も夜の御勤めはないくらい。まあ、彼には真面目に働いてお金を家に入れてくれるだけで良しとします。私を楽しませてくれるのは……和尚様の真剣だけ」

大人しそうな顔して、八重が大胆な科白をはく。

兵衛が聞いたら何と言うか……

「あら、真羅様のは真剣つてよりは黒船みたいよね」

「あははは、それ言ってるう」

女二人のひわいな会話に、にやにやしなから真羅が加わる。

「ならば今日は楽しめますか。私の真剣……いや黒船でね」

その日、八重と茜の帰りが遅くなったのは言うまでもない。
夫たちの竹光勝負とは違い、本当の真剣勝負には時間がかかるものなのだ……

時代は幕末。

激動の時代はすぐそこまできていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4756e/>

竹光侍（たけみつざむらい）真剣勝負

2011年4月15日05時59分発行